

## 《薬局サーベイランスコメント》

『1週間当たりのインフルエンザの推定患者数は第9週まで3週連続で減少しているものの、減少は緩やかであり、5週連続して100万人を上回った状態が続いており、第10週（3月7日～13日）も本格的な流行が継続する可能性が高い』

2016年3月8日  
済生会中津病院感染管理室  
安井 良則

### 薬 局 サ ー ベ イ ラ ン ス

(<http://prescription.orca.med.or.jp/syndromic/kanjyasuikei/index.html>) からの2016年第9週（2月29日～3月6日）の1週間当たりのインフルエンザの推定患者数は1,146,371となり、3週連続で前週の値（第6週 1,348,670、第7週 1,248,152、第8週 1,181,947）を下回りましたが、緩やかな減少が続いており、5週連続で100万人を上回っています（図1）。各都道府県別の第9週の人口1万人当たりの1週間の推定受診者数をみると、愛媛県、岐阜県、奈良県、福井県、富山県、鳥取県、高知県、岡山県、鹿児島県、広島県、愛知県の順となっていて、中部よりも西の地域での流行が目立ちます。また、まだ19県で推定患者数の増加が見られています。

3月7日（月）の推定患者数は261,125と前週である第9週の月曜日の値（2月29日：275,214）よりも減少していますがわずかであり、インフルエンザの患者数は引き続き減少していくものの、第10週（3月7日～13日）も本格的な流行が継続する可能性が高いです。

2015年第36週から2016年第9週までの累積の推定患者数は7,581,880(7,582,000)であり、年齢群別では5～9歳（21.6%）、10～14歳（13.1%）、40～49歳（12.9%）、30～39歳（12.5%）、0～4歳（11.0%）、50～59歳（7.6%）、20～29歳（6.8%）、60～69歳（5.5%）、15～19歳（5.3%）、70歳以上（3.7%）の順となっています（図2）。第9週は多くの年齢群では前週よりも減少していますが、10～14歳、15～19歳、70歳以上では増加が見られています。

国立感染症研究所感染症疫学センターの病原微生物情報(<https://nesid3g.mhlw.go.jp/Byogentai/Pdf/data2j.pdf>)によると、これまでのインフルエンザ患者由来検体から検出されたインフルエンザウイルス（2,899検体解析）は、A/H1pdm 57.1%、B型 30.4%、A/H3（A香港）亜型 12.5%の順となっています（図3）。また、直近の5週間（2016年第5週～第9週；これまでに883検体検出報告）では、A/H1pdm 61.3%、B型 34.7%、A/H3（A香港）亜型 4.1%の順となっていて、本格的な

流行となつてからは A/H1pdm と B 型インフルエンザの混合流行が続いています。

2015/2016 シーズンのインフルエンザの患者数は 1 月に入って急増し、1 週間当たりの国内の推定患者数は第 5 週以降第 9 週まで 5 週連続して 100 万人を超える状態が続いています。2009/2010 シーズンから本薬局サーベイランスによるインフルエンザの患者発生サーベイランスが開始されて以来今シーズン（2015/2016 シーズン）で 7 シーズン目となりますが、本格的な流行状態がこれほど長期化しているシーズンは初めてとなります。前述した通り、第 10 週も本格的な流行が継続する可能性があります。今後ともインフルエンザの患者数の推移には注意深い観察が必要です。

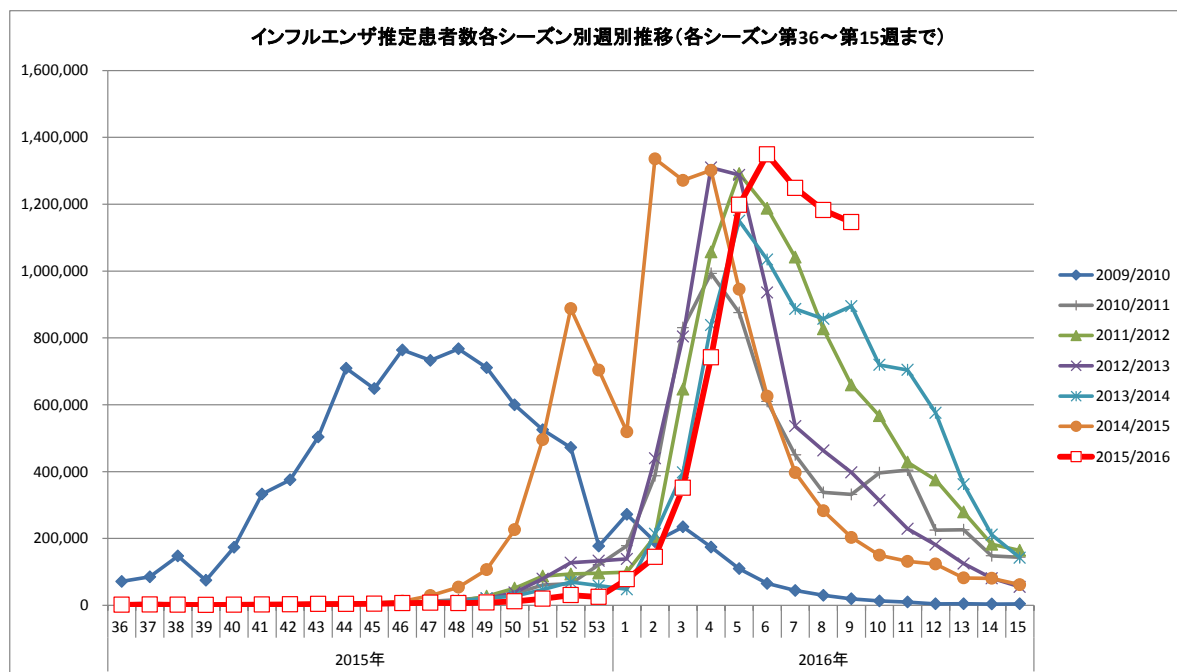


図 1. 過去 5 シーズンと今シーズン（2015/2016 シーズン）の第 36～第 15 週までのインフルエンザ推定患者数の週別推移

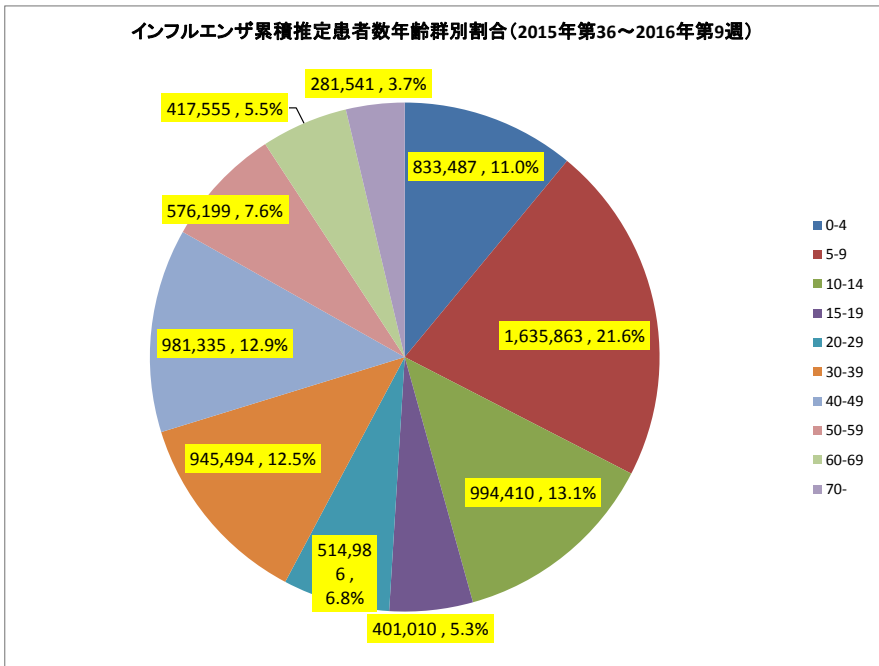


図 2. インフルエンザ累積推定患者数年齢群別割合 (2015 年第 36～2016 年第 9 週、累積推定患者数= 7,582,000)

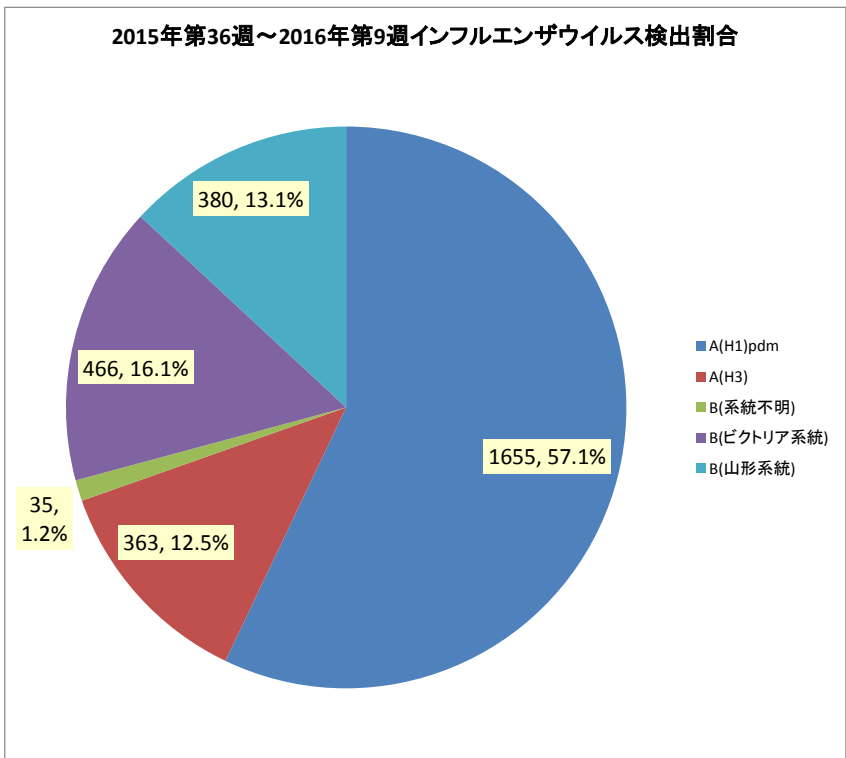


図 3. 2015 年第 36～2016 年第 9 週インフルエンザウイルス検出割合 (総検出数=2,899)